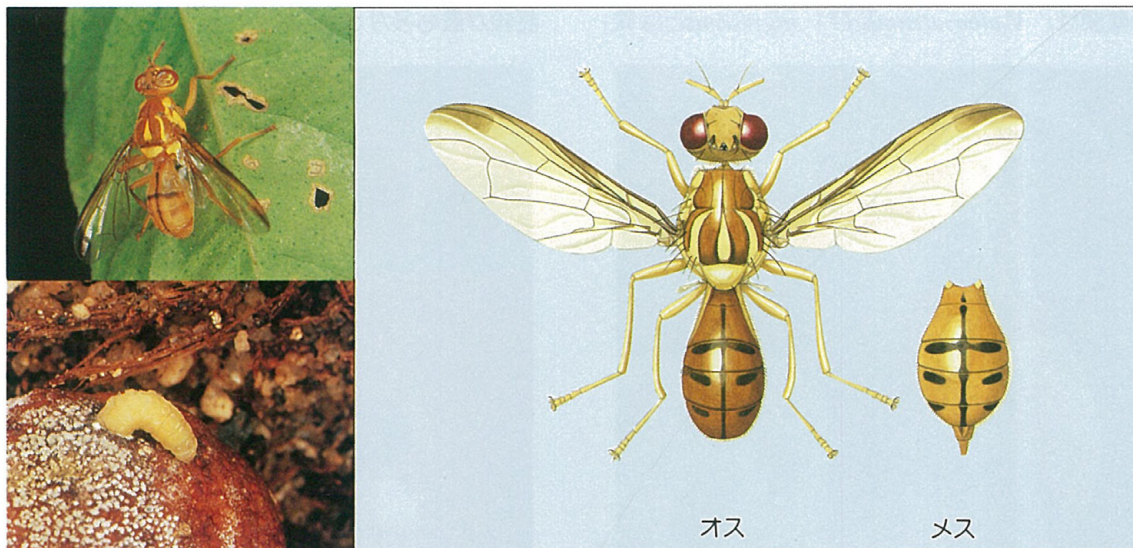


ミカンバエの分布と生態

ミカンバエ (*Bactrocera tsuneonis* Miyake) は、明治27年頃大分県で発見され、その後一部のカンキツ園でかなりの被害が発生したこともあるが、戦後、カンキツ園の害虫防除に農薬散布が行われるようになってから、本種の経済栽培園における発生は見られなくなり、現在ではまったく問題とされていない害虫である。しかしながら、米国では本種をカンキツかいよう病と同様、侵入を警戒している害虫の一つとして、本種の発生地域からのカンキツ類の輸入を禁止している。このた

ん、温州ミカン、タチバナ、キンカンなど比較的果皮の薄いカンキツ類に普通1果に1卵、大果には数卵行われる。卵期間は20日以上で、孵化した幼虫は、果実内のじょう嚢を食害する。複数卵産み付けられた場合でも1じょう嚢内には1頭の幼虫だけが生き残る。3齢に達した老熟幼虫は、11月下旬頃に果実から脱出して、土中に潜り蛹化する。蛹のままで越冬し約200日の蛹期間を経た後、翌年の6月上旬頃から羽化する。

成虫の寿命は、通常40～50日で、一頭の雌が一



ミカンバエの成虫と幼虫

め、米国へ温州みかんの輸出を希望している九州の数県では、本種の無発生を証明するための調査を実施するなど検疫面での関心が高まっていることから、本種の分布や生態などについて紹介する。
分布：日本では、大分、宮崎、鹿児島（種子島、屋久島、奄美大島などの離島にも分布）各県の一部の地域で発生が確認されている。中国大陸では四川省や貴州省に分布しているという記録があるが、詳しい情報は無い。

生態：わが国に分布するミバエ類の中では最大級の大きさで、体長11mmにも及ぶ。年1化性で、6月上旬頃から7月中旬にかけて羽化する。産卵前期間は17日～26日で、7月下旬から9月上旬にかけて交尾産卵を行う。産卵は、ポンカン、コミカ

生のうちに産卵する数は30～40個と考えられている。成虫は、日差しの弱い朝と夕方に盛んに活動し、交尾・産卵する。本種の生息地域は局所的で、被害がみられるのは、自然林に囲まれ放任されたカンキツ園に限られている。

野外の成虫はカイガラムシやアブラムシの分泌物を摂食するが、室内飼育では果汁や糖蜜などを与えると過食により寿命が著しく短くなる。

防除：戦前は捕虫網などによる成虫の捕殺に頼っていたが、戦後、有機合成殺虫剤の導入や、吐石としよ糖を主剤とする毒餌溶液の散布により、完全駆除に成功した地域もあるという記録がある。現在では、いずれの地域でも防除を行うほどの被害は認められなくなった。